

現代日本における「トロツコ問題」

——小笠原を知るための五冊

真崎 翔

あなたは線路脇に立っている。線路上では、五人が何やら作業をしている。あなたの目の前には線路の分岐点があり、あなたの傍らには分岐器がある。遠くから、制御を失ったトロツコが猛スピードで走ってきた。トロツコの進む先では、先程の五人が気づかず作業を続けている。あなたが分岐器で進路を切り替えれば、五人は助かる。しかし、切り替えた際にトロツコが進むことになる分岐線上では、別の一人が気づかず作業をしている。あなたは、どうすべきであろうか。これが「トロツコ問題」である。五人を救うために一人を犠牲にすることは、肯定されるのであろうか。あなたは何もせず、危険な状況を見過ごすであろうか。それとも、何か別の解決策を模索するだろうか。

「トロツコ問題」の提起する仮定は非現実的ではなく、むしろ現代日本における現実である。原発問題で考えてみよう。東日本大震災に見舞われる前は、公共の利益の代償を、原発を抱える自治体に払わせているという感覚が共有されていたであろうか。原発事故が起きてから、原発を特定の自治体で稼働させることの道義的問題に対し、人々の関心がようやく向けられたように思う。

他方で、在日米軍基地問題はどうかであろうか。基地を抱える自治体が日常的にいかなる問題を抱えているかについて、我々は日々の報道で多少なりとも知っているはずである。そうであるにもかかわらず、多くの

人々が、ほとんど躊躇なく分岐器を切り替え、「多数者の専制」を実践してまいいか。在日米軍基地問題に対する人々の態度は、原発事故以降の人々の意識変化とは極めて対照的に感じられる。しかし、右記の二つの事例が民主主義国家における同根の問題であることに、多くの人々が無自覚ではなからうか。

少数派に共感する意識の欠如は、いつか自分が分岐線上の作業員、つまり犠牲となる少数派にされてしまうかもしれないという危機意識の欠如ともなろう。分岐線上に作業員がいる。そして、その作業員にも家族がいる。日々の生活がある。こうしたことを強く認識した者にとって、分岐器を躊躇いもなく操作することは容易くない。トロツコ事故を防ぐ何か別の方法を必死に考えようとするのではなからうか。本稿では、「現代社会をもっと知るために」というテーマで、小笠原諸島に関する書籍を紹介する。なぜならば、小笠原は現代日本の根底にある争点を生々しく鮮烈に顕示する地域だからである。すなわち、小笠原の抱える問題は、国内島嶼地域の局地的問題として矮小化されるものではなく、むしろ日本の抱える普遍的問題なのである。小笠原を舞台とした現代日本の抱える問題について周知することが本稿の主旨である。

読者の多くが、小笠原諸島についてほとんど知らないかもしれない。そのため、ごく簡潔に小笠原の基礎的な知識を共有したい。小笠原諸島

は、東京から約千キロメートル南に位置し、観光地として栄える父島や母島を含む小笠原群島や、さらに約三百キロメートル南に位置し、今も一般人の上陸が政府により原則として禁じられる硫黄島を含む火山列島等からなる島嶼群の総称である。

近代に「発見」された時、小笠原には定住者がいなかった。その後、一八三〇年に欧米系や太平洋系の人々が父島へ入植を開始した。入植が開始されると、世界各地から人々が集まった。そのため、一八七六年に日本に編入された時には、日本で最もインターナショナルな地域の一つであった。国際色豊かな独自の文化が育まれた小笠原であったが、日本が軍国主義を推し進めるなかで、次第に要塞化された。また、日本においてナショナリズムが高まるにつれ、欧米系島民に対する差別が横行した。太平洋戦争における「硫黄島の戦い」の後、小笠原諸島は米軍に軍事占領された。サンフランシスコ講和条約が発効した一九五二年以降も、小笠原は沖縄や奄美とともに、「内地」とは分離されるかたちで米軍による占領下に置かれた。一九六八年に小笠原諸島の施政権が日本に返還された。しかし、軍事利用されている硫黄島への旧島民の帰島や遺骨収集活動は、未だ日本政府に制限されている。「旧島民の存在」という、北方領土返還をロシアに求めるレトリックと矛盾した方針が、硫黄島で取られているのである。軍事利用のために旧島民や戦没者とその遺族が置き去りにされる様は、まさに「トロツコ問題」そのものである。右記を踏まえうえで、本稿の主旨に即した、小笠原について知るための五冊を紹介したい。

①『小笠原学とはじめ』(ダニエル・ロング編著) 南方新社、二〇〇二年。

まず初めに、今日の小笠原研究の発展に果たした役割を無視することのできない、史学史的価値の高い一冊を紹介したい。本書の執筆陣は、いずれも現在の小笠原研究の先導者ばかりである。まさに、小笠原について知ろうとする者が最初に手にすべき古典である。

本書は、主に、文化、言語、社会ならびに歴史等の専門家らによって分担執筆されている。なかでも、学生時代の筆者にとりわけ影響を与え

たのは、石原俊の「海賊から帝国へ——小笠原諸島における占領経験の歴史社会学・序説——」と、ロバート・D・エルドリツチの「小笠原と日米関係、一九四五—一九六八年」である。辺境の島に過ぎない小笠原とそこに暮らす／暮らしていた人々が、戦後日米外交のダイナミズムに翻弄される様を知るにつけ、イルカのいる南の島という小笠原に対する陳腐なイメージが覆されたからである。

石原は、併合後に日本に帰化した小笠原の欧米系島民の実態を浮き彫りにし、歴史のなかに丁寧な組み込んでいる。当該論文を「歴史社会的な基礎作業」と位置づけた石原は、五年後の二〇〇七年に、『近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国』(平凡社)を発表している。本書は、石原が自身の「基礎作業」を発展させ、当時存命であった戦前、戦中ならびに戦後の父島を知る人々への貴重な聞き取り調査をまとめた、小笠原の社会学的研究における金字塔である。ぜひ併せて読んでほしい。

他方で、エルドリツチは、戦後の日米の安全保障関係の文脈で小笠原の戦後史を論じている。小さな島々が日米関係に与えた影響の大きさに読者は驚くであろう。なお、エルドリツチも六年後の二〇〇八年に『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』(南方新社)を発表している。手前味噌であるが、拙著「核密約から沖縄問題へ…小笠原返還の政治史」は、石原とエルドリツチの先行研究に負っているところが多い。『小笠原学こととはじめ』は、今後新たな研究の種を蒔き続けるであろう。

② 秋草鶴次『十七歳の硫黄島』 文藝春秋、二〇〇六年。

小笠原は父島の同義語とされるくらいがあるが、个性的で変化に富む島嶼群の総称である。そして、世界で最も有名な小笠原の島は硫黄島に他ならない。ジョー・ローゼンタールの撮影した、海兵隊員が硫黄島の摺鉢山山頂に星条旗を立てる「硫黄島の星条旗」写真を誰しも一度は見たことがある。『硫黄島の戦い』という戦史に埋没しがちな生身の人間の悲痛な戦争体験について理解することのできる一冊を紹介したい。

著者の秋草鶴次は、十七歳の時に「硫黄島の戦い」を経験した。米軍の捕虜となり一九四五年に帰国した秋草は、硫黄島における戦争体験に

ついで備忘録を付け始めた。両親が悲しむという理由で秋草はそのメモを隠していた。しかし両親の死後、一九七四年頃から、その膨大なメモを基に回顧録の執筆を始めた。本書は、その回顧録に基づいている。

秋草の戦争体験は、現代を生きる我々の想像を絶するものである。硫黄島の守備隊は、大本営から見捨てられたが、投降することを許されなかった。換言すると、生きることを許されなかったのである。本書において生々しく描写される極限状態の人間が取る行動は、現代日本を生きる我々の理解の範疇を越える。秋草は、硫黄島における経験を「人間存在に対する極限の『耐久試験』」であったと述懐する。硫黄島における戦没者の半数以上が、安全保障上の理由等により未収集の状態である。本書を読むと、戦没者やその遺族への政府の無責任な対応に対する問題意識が芽生えるのではないか。遺骨の帰りを待つ遺族たちにとって、国家による「耐久試験」は今なお続いているのである。

生前、戦友たちの死や自身の生について秋草は自らに問い続けた。秋草が見出した仲間の死の意味とは、第二次世界大戦後の日本が戦争をしてこなかったということであった。それでは、秋草自身の生の意味とは何であったのか。そのことについて秋草自身の言葉として本書で述べられてはいないが、平和の語り部として生きていくことだったのではなからうか。秋草は二〇一八年に逝去したが、本書は今後も平和教育における必読書として読みつがれるべきものである。

③ ジェイムズ・ブラッドリー、ロン・パワーズ／島田三蔵訳『硫黄島の星条旗』文藝春秋、二〇〇二年。

硫黄島における日本人の戦争体験のみを伝えることは片手落ちであるため、アメリカ目線の「硫黄島の戦い」についても紹介する必要がある。多くの名もなき兵隊が非業の最期を遂げた地であることは、日米に共通した事実である。そうであるにもかかわらず、多くの日本人から悲劇の地として想起される硫黄島は、アメリカにとって今なお栄光の地の地である。本書は、硫黄島をめぐる日米の歴史認識の齟齬の理由を知る手がかりとなる。なお、二〇〇六年に公開されたクリント・イーストウッド

監督の『父親たちの星条旗』は、本書に基づいている。

本書は、「硫黄島の星条旗」写真の背景にある実話ということになっている。そして、筆者はこの写真によって一躍脚光を浴びたジョン・ブラッドリーの実息である。写真が戦時国債キャンペーンに大々的に利用されたことで、その兵隊たちは英雄に祭り上げられた。

しかしながら、祖国における英雄譚と、兵隊たちの実像は大きくかけ離れていた。写真に写り込んでいた六名の兵隊の生い立ち、写真撮影の裏側、そして撮影後の歩みを通して、戦地に赴いた兵隊たちの実相を浮き彫りにし、栄光の影でほとんど顧みられることのなかった戦争の普遍的な暴力性を本書は見事に提示している。祖国において、六名の兵士たちを特定することに人々が関心を寄せていた頃、すでに三名が硫黄島で戦死していた。ブラッドリーは、生き残った自分が英雄視されることに負い目を感じていたのではないかと著者は推測する。犠牲になるのはいつも立場の弱い人々であるという真理は、秋草の回顧録に通底するところである。

なお、本書には書かれていない後日談がある。それはブラッドリー自身も執筆当時知らなかったことである。ぜひ、本書を読んだ後で、ハロルド・シュルツ (Harold Schultz) という名を検索してほしい。本書において謎のまま残されてきたジョン・ブラッドリーの戦後の不可解な態度について理解できるはずである。

④ 石原俊『ハ群島Vの歴史社会学』小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』弘文堂、二〇一三年。

硫黄島が悲劇の地であったという日本における一般的な認識に上書きされ、硫黄島の豊かな文化や歴史は埋没してきた。本書には、戦前の硫黄島における人々の生活の営みについて書かれており、硫黄島が人を寄せ付けぬ不毛の地ではないということを伝えている。硫黄島そのものを理解するうえで、石原の『硫黄島』国策に翻弄された百三十年（中央公論新社、二〇一八年）という研究史的価値の高い本がある。ただし、飽くまで小笠原諸島についての書籍を紹介することが前提であるため、小

笠原群島についても記述の深い本書を取り上げる。

石原は『小笠原学とはじめ』の執筆者のなかでは若手であったが、小笠原の歴史社会学研究において今や他の追隨を許さない研究者の一人である。離島として矮小化されがちな小笠原諸島の歴史を、壮大な世界的文脈に位置づけることに本書において石原は成功している。小笠原の歴史を論じるうえで、石原は一貫して島民の経験に寄り添ってきた。本書でも、日本社会において「中心」により客体化された「周辺」としてではなく、日本と米国の国際関係などに翻弄されながらも主体性を失わずに生き抜いてきた存在として、島民あるいは旧島民たちの生き生きとした歩みを見事に描き出している。本書には、今では話を聞くことの難しい小笠原諸島民らへのインタビューも多く掲載されている。公文書等の一次史料も丁寧に検討しており、説得力のある議論を展開している。小笠原群島と火山列島の通史を概略的に学ぼうと、今現在、本書以上のものはないと言ってよい。

石原は、小笠原諸島における現代的な問題を浮き彫りにしている。その一つの例が、未だ一般人は疎か旧島民さえも原則として上陸を許されないことに起因する硫黄島の問題、すなわち帰島問題である。本書を読めば、こうした問題が、現代の日本社会における普遍的問題の一つであることに気がつくであろう。つまり、基地を「多教者」の生活圏である「中心」から遠ざけるために、「周辺」化された島嶼地域と、そこに暮らした／暮らす人々の生活を犠牲にすることが許されるか否か、という問題である。本書を読めば、小笠原について学ぶことの現代的意義について理解が深まると思う。

⑤ Chapman, David. *The Bonin Islanders, 1830 to the Present: Narrating Japanese Nationality*. Langham, MD: Lexington Books, 2016.

本書は国際色豊かであるため、小笠原の歴史について英語で書かれた書籍も紹介したい。かつて日米の交差点であったことから、小笠原諸島は日本とアメリカとは切っても切れない関係にある。こうした歴史的背景も相まって、小笠原の歴史研究は、主に日本人とアメリカ人によっ

て担われてきた。しかしながら、書き手である歴史家のナショナル・アイデンティティを一切排することは、歴史記述において簡単なことではない。したがって、小笠原の歴史が、主たる当事国である日本とアメリカの歴史家からしかほとんど叙述されてこなかったということは、実は学問的に問題である。小笠原諸島民のルーツがインターナショナルである点に鑑みると、殊更である。

本書を取り上げたもう一つの理由は、まさにそこにある。著者のチャップマンは、オーストラリア人である。また、そもそも日米関係史家でもなければ、島嶼研究家でもない。チャップマンの主たる学問的関心は日本の国籍問題や人権問題であり、こうした研究の過程で小笠原に辿り着いた点が本稿の主旨と合致している。チャップマンは、日本への併合から米国による占領期までの欧米系島民の苦境について、日米両政府に対して批判的である。安全保障というレトリックの下に等閑視されがちな島嶼地域の人々、ましてや自国民ではない人々に対し想いを寄せる地球市民の姿勢には見習うべきところが多い。比較的平易な英語で書かれているため、英語学習も兼ねてぜひ学生に手に取ってほしい一冊である。

右記の五冊の魅力や意義について十分に紹介することは、もとより筆者の手にあまることである。本稿の目的は日本の「トロツコ問題」において自明的な小笠原の抱える問題を読者と共有することである。その目的がいかにばかりか達成できていれば幸いである。安全保障や抑止という漠然とした論理のもとでなおざりにされる島嶼の人々、あるいは関係する人々の暮らしがある。硫黄島について言えば、旧島民すら上陸が制限されていることに起因する遺骨収集の遅延のために、遺骨のない空の墓前に花を手向ける人がいる。「島」から「内地」へ、あるいは「内地」から「島」へ、帰郷できない人がいるのだ。これまでほとんど語られることのなかった人々に対する国家による「耐久試験」は続いている。こうした問題について、右記の一冊でも手にとって思いを馳せていただければ、筆者として望外の喜びである。